

「第22回国際動物学会議および第87回日本動物学会年会合同大会」開会式
秋篠宮殿下 お言葉（和文仮訳）

平成28年11月14日(月)

本日、ここ沖縄県の恩納村において、30を超える国と地域から多くの参加者を迎え、「第22回国際動物学会議」および「第87回日本動物学会年会」合同大会が開催され、皆様とともに出席できましたことを誠にうれしく思います。

「国際動物学会議」は、4年に1度開催される動物学の分野で最も長い歴史を有する国際会議であり、日本での開催は初めてとなります。今回の会議では、ゲノム時代の到来による動物学の新たな展開を表現する「21世紀における動物学の躍動」をメイン・テーマとして、動物学に関する様々な発表や議論が行われると伺っております。

動物学は間口が広い分野で、分類学や系統学をはじめ、比較解剖学、機能形態学、発生学、生理学、分子遺伝学、生態学、行動学など、生物科学に関わる多くの分野を包含する学問であると理解しております。そして動物学は博物学以来の長い研究の歴史を持つとともに、生物多様性の保全の重要性が認識されるようになったことで、環境学とも相まって、学としての重要性が再認識されるようになったといえるでしょう。

特に近年、ゲノム科学の発展により、生物が長い進化の過程で獲得したさまざまな情報をゲノムレベルで知ることができるようになりました。なかでも分子系統学においては、現生種の分岐図を作ることにとどまらず、化石群の系統的位置を決めたり、遺伝子の構造と機能を議論したりすることによって、現生種へ連なる過去の生物の表現型、そして進化史における適応にまで踏み込む研究がなされるようになりました。

自身は動物学の研究者ではありませんが、動物とそれを考究する学問に関心を寄せている者の一人であります。とくに、動物の家畜化については、主として民俗生物学と民族生物学の視点から、その動機と人為選択による変異などに興味を抱いております。そしてこのような家畜化を推察していく過程には、人側の視点とともに、形態学や生理学、行動学、分子遺伝学など、少なからず動

物学が介在する場面があり、動物学がさまざまな領域に関わっていることに、あらためて思いをいたしております。

このたびの会議では、学術的な研究発表のほか、市民や小中学生・高校生にも開放される研究用の動物や標本の展示や公開講座も行われると聞いております。このことによって、動物学の重要性が社会に認識されるとともに、その面白さが次の世代の人たちに伝わることを期待しております。

おわりに、この会議が皆様にとって実りの多いものとなるとともに、国際動物学会議ならびに日本動物学会が一層発展されることを祈念し、私の挨拶と致します。